

文芸島に迷い込んだ旅人たちへ

月刊 **エトランゼ**

創刊号 (2)
2014.01.29

陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆきます。

日芸初の月刊ライトノベル誌、
創刊

【新連載】

CCC (クロノ・クロス・クロニクル)

修平 / イラスト Dake

まな
学び舎のブリットル

城野伊織 / イラスト 木村なづき

カラカラ

霜山モリス / イラスト めーぷる

【特集】

売文の徒会長 独占インタビュー

巻頭カラー

CCC(クロノクロスクロニクル)

修平 / イラスト Dake



学び舎のブリットル

城野伊織 / イラスト 木村なづき



カラカラ

霜山モリス / イラスト めーぷる



エトランゼとは 第1回

ケミーと文芸島ちゃんが毎回「エトランゼとは」について考えるコーナーです。



本音言っちゃうと、未だによく分かんないんすよね



え？ 表紙に「ライトノベル誌」って書いてあるじゃない



そうなんですけど.....そもそもライトノベルって何、みたいな



ライトミールのなあれでしょ？ とりあえず何か手軽に読みたい、みたいな



なるほど。 ていうかその前に、あなたは一体



私？ 私は文芸島の擬人化らしいわ。まあ、君と同類みたいなものよ。



ど、同類.....？



実はまだ名前がないのよねー。便宜上、文芸島ちゃんって呼ばれてはいるけど



え、じゃあ募集してみます？ このコーナーで



え、そんなことしていいの？



編集長の権限らしいです



へえ、意外とゆるゆるな雑誌なのね



それはあなたが擬人化してる時点で気付くべきですね

まあいいわ。ていうか私さえ自分のキャラ掴みきれてないのに名前募集ってどうなの？



俺は物心つく前からケミーでしたよ



いや君は割とイメージ持たれやすい見た目じゃないの



そう言うならあなただって.....



え？



ヤンデレ.....



え、うん、なるほど？ あ、もっと病んでる感じの方がいいですかね



俺は別に構いませんよ



別にとって.....その他人事みたいな言い方嫌なんだけど.....



え、ちょ、あれ



それはそうと、ライトノベルの定義の話はどうなったのよ



あ、戻った



さっき言い忘れたけど、キャラ愛って大切じゃない？

作品愛と言ってもよさそうね。

どちらにせよ、愛される作品であることは必要な要素だと思うの。

あ、別に「読者に媚びろ」とは言ってないのよ？



言わんとしていることは分かります



要するに、私は、可愛い子が出てくる作品が読みたい



あれー？



君もいつかきっと分かる日が来るわ.....そう、文芸島は孤独な場所なの.....



全力で脱出したいんですが



あら、それは無理ね。

そう、「文芸島に迷い込む」というのは、精神的な問題なの。
君も、君自身が知らない心の奥底で、形にならない思いをくすぶらせているのね



よく、分かりません



じきに分かるわ。

どうして「言葉にしたい」なんて思うのか。
いや、言葉にせずにはいられないのよ、人間というものは



言葉に、せずには.....



.....ようこそ文芸島へ。

迷えるエトランゼよ、私の手をとりなさい。
見果てぬ夢を永遠に食むがよい。



教えてください。あなたは.....



ふによふによふによ（耳打ち）



あ、はい、お腹空いてたんすか。



もー、君がライトミールなんて言うからー



言ったの俺じゃないですよね!?



というわけで、今回はこの辺で!



締められたっ!

～今回のまとめ～

ライトノベル → ライトミール的なあれ

ケミー → 文芸島に迷い込んでしまったらしい

文芸島ちゃん（仮） → 名前募集中らしい

月刊エトランゼの未来やいかに!?

次回に続く!

エトランゼは、情報誌と文芸誌の特色を併せ持った月刊ムック誌になります。

メインコンテンツとして、連載ライトノベルを数作品ずつ掲載するほか、サブコンテンツとして、陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆく予定です。

KMITの既刊誌 好評販売中！

お求めの際はこちらのアドレスまで kmit.kemmy@gmail.com

電子書籍もあります。

次刊予告

連載2 タイトル、読切1 タイトル追加予定

【連載】 レストラン・グラフィティ **scene2** Q

【連載】 フィッツロビンシリーズ **episode2** 竹見名央

読切短編一作

クロノ・クロス・クロニクル

C C C

第一幕

修平

illust Dake



キャラ紹介だよ

【黒櫃 菅木（くろびつすがき）】



画家を目指す少年。才能の限界を感じて苦悩している。

【九十里 刻（くじゅうりきざみ）】



菅木の親友。
彫刻の天才。

story

芸術の都（ガンダルヴァ）で画家を目指す少年“黒櫃菅木”は、度重なるコンクールの落選に才能の限界を感じていた。

一方、親友の“刻”は、その天才を周囲に認められ、成功へ近づいてゆく。

嫉妬と友情で行き違う“菅木”と“刻”。

そんな二人の心とは裏腹に、都は年に一度の芸術祭で盛り上がりを見せていた。

第一章 芸術都市（アルカディア）

街中央部に屹立する巨大時計塔を軸に、半径五マイルに及ぶ芸術都市。「ゴミさえも彩らなければ気がすまない」という皮肉のとおり、歩道は嵌め込みガラスによって虹のように煌き、植えられた街路樹には鈴が散りばめられている。運河の底は堆積する無数の彫刻によってあたかも珊瑚礁のようだ。外灯代わりの幻灯機からは、編集過程で切られたフィルムがアトランダムに上映される。

この街に、一人の少年が暮らしている。名前は黒櫃菅木（くろびつすがき）。華々しい表舞台と離れた、洗濯槽と擲揄される下宿の、さらにその屋根裏部屋で寝息をたてていた。

朝日を拒むようにキャスケット帽を目深に被り、組んだ足をフットボードにのせている。黒炭で真っ黒になった指先に、一羽の蝶がとまった。キャスケットからこっそり目を開きそれを見た。美しい羽の模様が心の豎琴を弾く。同時に哀しみが心に影を落とす。

現実には綺麗だ。世界は全て必然によって作られている。打ち寄る波が均す、黄金の浜辺は静謐で、陽光を浴びんと競うように茂る森林は、情炎に焦げた。そんな壮大なことに限らない。明日にも失われているかもしれない蝶の羽、石畳に捨てられる穢れたパン、窓から差し込むいつも通りの朝日。全てが綺麗。綺麗過ぎた。

「俺は自分の殻を破れない」と彼は思った。

寝台に座り頭を抱えると、全ての原因が自分の脳味噌にあるような気がしてきて、額を触る手が汗ばんだ。この頭のせいで、自分は駄作を作っているのだ。そこまで考えて、彼は慌てて首を振る。

「寝よう……」

全て忘れてしまおうと目を閉じて、寝返りを打ったその時、彼の手に柔らかい何かが当たる。素描用のモデル彫刻のような形をしている（つまり人のボディである）が、肌さわりは石膏とは似ても似つかぬ柔らかさ。筆洗器の底に溜まった油のジェリーのように、ふるふると震え、仄（ほの）かな温もりも感じられる。散々手でこねくり回した末に得られた回答は、彼が本能的に「アレかもしれない」と考えたものと同じもので、直感というものは大切にすべきなのだと思いつつ、（自分のではない）服の下から手を抜いて、布団を捲った。

そして、それを見た。

波に洗われる様にベッドから転げ落ちると、彼が苛立ちに任せて壊したキャンバスをさらに潰した。女子（おなご）が！ 女子がおる！ と、どこのものかも分からぬ訛り。爆心地のような散らかりを見せる部屋の中、四つんばいになって逃げだそうとするも踏鞴（たたら）をふんだ。寝台の下にある給料袋が無事かを確認するためであったが、冷静になって見ると、その寝顔に見覚えがあることに気がついた。

「……刻（きざみ）……なのか」

一ヶ月程前から音沙汰のない友人のことを思い出す。でも彼女の胸はもっと平坦だった気がす

るし……、いやでも、胸をじっくり見たことも、触ったこともないのだから断言してしまうのは安易に思える。曲がりなりにも（変な言い方だが）彼女は成長期の女の子なのである。男子三日会わざれば刮目して見よという格言があるが、あれは女子にも通ずることなのか。

菅木が使っていた枕を奪って、すやすや寝息を掻く姿は刻に間違いなく、揉めるほどあったとは思わなかったとつい自分の右手を見てしまう。まだ微かに人肌の温かさが残っていた。

菅木の大声によって眼を覚ました少女は、赤茶色の髪を両手でかきながら、「あれ、ここ、どこだ？」と周囲を見回す。一方菅木は昨夜のことを必死に思い出そうとした。酒も薬もやっていない、夜遅くまで絵を描いて、蝋燭が切れたので就寝した。神に誓って、不貞は働いていない。

「なんでお前が俺のベッドにいるんだ」

傍から見れば最低な男である。

「確か、昨日は酔っ払ってて……、家まで帰るのが面倒臭くなっちゃったんだな。それで、菅木ん家に来た、と」

「来たよ、じゃねーよ」

原因が彼女にあったこと、そして、自分たちの間に何もなかったこと確認して、彼は胸を撫で下ろした。本来、菅木よりも用心すべき刻当人は「いいじゃんか。数カ月前までは毎日一緒に寝てたんだからよ」と手をひらひらさせている。

刻をずっと「同性」だと勘違いしていたとは言えなかった。当時は、随分馴れ馴れしい態度をとってしまったと思う。気付いたときは穴に入りたくなかった。

「あの時と今は違うんだ」

「どう違うって言うんだ？」

でも数ヶ月前と変化したのは、その勘違いの解消だけであろうか。菅木にはそうも思えなかった。数日前、街中で擦れ違っても声を掛けられなかったのが、何よりの証拠である。彼はそのことは秘密にした。刻には悪意がないことは、分かっていたから。

「そりゃあ、色々だよ。お前こそ、二十八日間も師匠んとこでなにしてたんだ？」

「心配してくれてたの？」

「心配とかは別にしてなかったけど、うるさいのが途端に消えると、変な感じがするだろ」

彼女は唇を尖らせると「ふーん。そうなんだ。じゃあ内緒」。

「な、内緒？」

「そうだよ。別に心配してないなら言う義務もないだろ？ だから内緒。プライバシー」

使い慣れぬ片仮名言葉に、彼女の唇は妙な動きをする。

「……別にいいよ。勝手にしろ。ただ、お前がそういう態度なら俺もプライバシーを守ってやるからな。秘密主義になってやるからな」

「あ、郵便受けに選評がはいってたよ」

「いきなりプライバシー破られてんじゃねーか」

菅木は諦めのため息をつく。彼の気も知らず内側にずかずか入り込んでくるのは、昔からの癖である。これだから脳天気な奴は嫌なんだよと冗談めかして言いながらも、怒れずにいるのは、入り込んでくるにせよ土足ではなかったからだった。

刻が衣囊（ポケット）から出したのは、若竹色の封書である。厚紙で作られた封筒の上に、葛（つた）を赤く染色して作られた紐が巻かれている。刻の手からそれを奪い取って、菅木は紐を解こうとするが、思ったより固いその戒めに、指先は赤くなるばかり。見かねた刻が、鑿（のみ）で断った。

不安気に彼女が尋ねる。

「どうだった？」

彼女の質問に、答えることが出来ない。彼は「落選」の文字が書かれた手紙を握りつぶすと、窓の外、水廊に向かって放り投げた。

「あっ」

彼女の視線は放物線を描く紙を追った。水面に落ちる音を聴き終えてから「ちゃんと選評は読んだのかよ」と声を荒らげる。

菅木は冷や水を浴びせられたような心境で、一瞬言葉を失うも、なぜ俺が怒られねばならないのかという憤りが勝って、声を絞り出す。

「な、なんだよ。いきなり」

「選評にはなにが悪かったとか、どこが良かったとか、色々書いてあるんだよ」

声を荒げた時から怒ってはいないことが、彼女の表情から伺えた。あの声は条件反射で発せられたものらしく、声に感情が伴っていなかったものと見える。

彼女は困惑しているように、菅木の目に映った。そしてそれは恐らく当たっていた。彼女からすれば、菅木は上達の好機を自ら放棄した様に見えるのだから。

選評なんて全部嘘だ。批評家は書いてなんかいない。「色は良かったですね。構図は駄目です」とか、それっぽいことを使い走り判子を押しみたいに書いて、お茶を濁しているに決まっている。でも、彼女がそのことに気づかないのも無理はない。選評というものを貰ったことがないまま、無花果彌生（いちじくやよい）彫刻賞で金賞（六〇〇〇作品中の一位）を獲り、今や選評を書く側の人間である。

「選評なんて」と言いかけて言葉が止まる。見たこともない世界をどうやって説明しよう。世の中はお前が考えているみたいに善意ばかりで出来ていないんだよとでも言えばいいのか。滑稽ではないか、自分も刻も既に既婚であってもおかしくない年齢である。子供じゃあるまいし、論じたくなんてない。

「……どこが悪いのか、俺の中ではよく分かってんだよ」

「本当か？ ……そっか、そうだよな！ ごめんな。よけいなこと言って」

口をついて出た嘘を疑いもせず信じこんで、簡単に謝って、そして今や照れを隠すように笑っている。あの絵のどこが悪かったんだろう、と反芻しながら、「別に」と言った。喉に魚の骨が刺さったような、痛みがあった。

落選した絵を供養するみたいに、「あの樹の絵。なんて名前だったっけ？」と刻が言った。こうして話題に出すことで、絵が浮かばれると信じているみたいだ。千時間掛けて描いた絵も、落選してしまえば塵（ごみ）だ。その塵に意味を持たそうとしている姿が、なんだか笑えてきた。

「あんな樹が、あるわけないだろ」

彼が描いたのは、樺（かば）色の太い幹を持つ大きな樹だった。それは小高い丘の上に立っていて、何百万もの花びらを風で燃やしながらか周囲に降り舞っている。薄桃色の花は綺麗な流線を描き、花卉の先端はV字に切りとられていた。

生物学的ではない、と菅木の絵を見た芸術家気取りが言った。「こんなに大量の花弁をつけるのに、菱（しお）れもせずに散らすなんて、そんな樹があるわけない」と言うのが彼の意見だった。また、別の者は「幹の後ろで誰かが揺らしているのだ」と絵を笑った。菅木も一緒に笑った。そうするしか、彼には道がないように思われたからだ。

そういう笑顔の後は決まって、自分を殴りたい衝動に襲われた。自傷なんて感傷的なことではない。つまり彼は誰かを罰したくて、また罰されたくて、自分を殴れば一石二鳥だと考えたのだ。

人と絵の話をするのが怖い。部屋に引き籠っているのは、そういう思いもあった。しかし例外がある。刻と芸術の話をするのだけは楽しかった。耳をかたむけようという気にもなった。しかし今はどうだろう。環境と立場の激変に、自分が付いて行けているとは思えない。

「よく、夢で見るんだ。こういう景色を」

「夢で見たものを描いてるのか？」

刻が怪訝そうに彼を見る。心臓を握られたような息苦しさが鉄砲水のように彼を襲った。深い潜水を終えたように息を吸い込む。舌の奥で喉が細動しているのが感じられた。視線をそらして「馬鹿みたいだろ。笑えばいいさ」と吐き捨てる。

以前の彼ならば、刻相手に議論を放棄したりしなかつただろう。でも今は違う。彼女は何も変わっていないのだが、以前と同じではいけないという先入観が彼にあった。対等に語ってはいけない義務感のようなものが。

「凄い想像力だな！」

「.....そんなことない」

刻が賞を獲った作品を見たことがある。その時彼は、天才という存在を、信じないわけにはいなくなかった。そんな人物に褒められて、素直に喜べる人がいるとしたら、それは芸術家ではなく与えられた骨をしゃぶるだけの飢えた犬だ。

「今日は親方の所、行かないのか」

そっちに行け、と追い払うつもりだった。自分はまだこの刻に慣れていない。覚醒していない寝起きの頭で話していたら、今以上の醜態を晒すような気がした。

「ああ。親方もカーニバルで忙しいんだよ」

目算が外れるどころか、横っ面を叩かれたような思いを抱く。

「今日何日だ」

「おいおい、本当に大丈夫かよ菅木。今日は十一月九日だぜ」

四日間もまともに日を浴びなかつたせいで、すっかり時間の感覚が狂っていた。彼は半年前から止まったままになっている壁掛け時計を見る。半分頭を出す鳩は、頭に埃をかぶっていた。

そうか、今日はカーニバルの日だったのか。

「じゃあ尚更お前は忙しいんじゃないか」

「親方は自分の個展を開くみたいで、お前は邪魔になるから来るなって言われた」

「個展。流石だな、無花果彌生は」

彫刻の分野では五指に入る大家。

——そして彼の一番弟子、刻。

授賞式の様子が頭に浮かんだ。シャッターフラッシュに目を回し、トイレ休憩に一時間も使い、転んでトロフィを落としそうになった。その時は友の成功を、心から祝うことができたのだ。彼女は何も変わらない、その確信があったから。

皮肉にも、変わったのは彼女ではなかった。

「この部屋だって個展みて一なもんじゃん」

彼女は部屋に散らばる無数のキャンバスに、視線を泳がせた。この街では珍しい光景ではない。画家志望の部屋とは往々にしてこういう具合である。ただ菅木の部屋に散らばる絵は全てが幻想の光景と一貫しているのです、異様と言えれば異様である。

陸蒸気（おかじょうき）と似ている乗り物だが、火室も煙突もない。人がたくさん乗っているが、動力の見当もつかなかった。それは造船場のように大きな建物の中へ、今滑り込もうとしている。建物の梁や柱は全て「エ」型の鉄柱によって作られている。屋根はガラスで出来ているらしい、こんなに大きくて、自重に耐えうるガラスを作る技術は、この街にはない。

「陸蒸気？」

「これは蒸気で走らないんだ」

「じゃあどうやって走るんだ」

「分からない」

菅木のある意味無責任ともとれる発言に対し、刻は訝ることをしなかった。彼女はあらゆる場合において寛容なのだ。芸術作品が、必ずしも全て作者の意図によって生まれているわけではないことも、熟知している。

「じゃあこっちの絵は？ ジオラマか？」

時計塔をも凌ぐ、長方形の高層ビル。それらが幾棟も立ち並んでいる。五十階以上の建造物は、一体なにを材料に使ったら作れるのだろう。ここまで高いと、どんなに固い煉瓦も粘性の強いモルタルも、自重に耐え切れず崩壊してしまうだろう。

大きな絵がビルの中腹に掛けられている。その絵には、肌が白く、髪が黒い女性の顔が大きく描かれていた。誰だろう、彼女と会うたびに考える。その女性が共通していろいろな絵に出現していることを、菅木は気付いていた。きっと何らかの意味があるのだろうと彼は思った。もしかしたら、記憶に埋もれている母の姿なのかもしれない。アルカディアで髪が黒いのは知る限り彼だけだが、絵にはそういう人がたくさん写っている。

「刻。もういいだろう。カーニバルなんだから、そっちを見てこいよ」

今思い出したように、というか、今思い出したのだろう、刻が手を打つと「一緒に行こうぜ」。「嫌だよ」と投げやりに返す。菅木だって全く行く気がなかったわけではない、ただ、ふらっと現れた彼女に従うことに、抵抗があった。

「メ切が迫っているんだ。今日も缶詰だよ」

「でも、行き詰ってんだろう？」

彼女は画廊の様子からそれを推察したらしい。

否定は出来ない。菅木はここ二日間、ろくに絵を描けなかった。悪戯に寝台で横になって、借りた講談本を読んだり、壁を這う蜥蜴（とかげ）の鉛筆模写（デッサン）をしたり、そういう無為によって時間は失われた。

「今日は絵のことを忘れようぜ。祭りで気を晴らせば次のアイデアにも恵まれるさ」

「適当なこと言うなよ」

と菅木は訝しむ。

「本当だって。こんな暗い部屋で唸ってたらすぐに地下生活になっちゃうよ」

彼は部屋の惨状を見回した。どこを見ても出来損ないの絵だらけ、己の凡庸さを責められているかのようなようだった。窓を開けて初めて、この部屋に充満する油の臭いに気がついた。壁も床も空気さえ、ここは絵に満たされている。

「……確かに」

古人も、筆を捨て街に出よといっている。――結局のところ、最初から祭りに行きたくて、でも唯々諾々と従うことに抵抗があったから気乗りしないような態度をとっただけで、自分は説破される時を見計らっていただけな気がする。

「よし！ じゃあ決まり。外で待ってっから、早く来いよ」

彼女は窓から身を乗り出すと、躊躇することなく、そこから飛び降りた。部屋からでは彼女がどうなったか見えないが、おおよその見当は着く。鑿を壁に走らせて減速し、この下宿の地下を通る排水道の中へ入るのだ。有名人は大変だ、洗濯槽に出入りしていることが知れたら問題になる。

一階の窓が開き、そこから大家在屋根裏を見上げた。

「まあ壁を駄目にしたのかい！？ 今夜は左官屋（さかんや）になってもらうからね！」

金属の甲高い音がして、鍋を窓縁に投げつけられたのだと気付いた。菅木は窓に走り寄ると、そこから半身を出して、一階の窓からこちらを見上げる大家を見返した。

「大家さんこれは刻が――」

「そんなのっ、知らないよ！」

大家在投げたフライパンの蓋が、フリスビーのように回転しながら飛来したので、彼はもぐらのように頭を引っ込めてそれを躲（かわ）した。落ちていたペインティングナイフを外につきだして、刃に映る大家と視線が合った。自分の顔面に鑿を走らされたって、こんなには怒らないんじゃないかと思うほど、激怒している。

「じゃあ刻にやらせたらどうだい！ 誰でもいいから直しとくんだよ！」

大家在勢い良く窓を閉めた。彼女の部屋で二人の赤子が同時に泣き始める。大家はまるで別人のように「おおーよしよしー」と言った。劇団に入ればいいのにと菅木は思ったが、口が裂けてもそんなことは言えなかった。それよりも、壁をどうするか、だ。刻が素直にやってくれるはずはない。彼は縄に吊り下げられる自分を想像して、ため息を吐いた。

大家がいなくなったのを見計らって、排水道の中から刻が半身を出した。彼女はとても楽しそうだった。もしかしたら、二ヶ月前と変わらず彼女を怒る大家を、微笑ましく思ったのかもしれない。

「そんな顔してないで早く来いよ！ 団長の演劇、始まっちゃうぜ」

誰のせいでこんな顔になったと思っているんだか。菅木はハットラックから、牛皮のペンフォルダーをとり、それを右肩に通した。そして、給料袋を懐に突っ込む。

洗濯槽の玄関から飛び出そうとしたその時、菅木の後ろ襟を誰かが掴んで持ち上げた。一体どこにそんな力があるのだろう、二人の乳飲み子を背負いながらも、その腕力は衰えない大家が「菅木、壁も直さずどこに行くんだい？」

と、額に青筋を浮かべながら言った。

「か、カーニバルに少々。だから、あの、壁は夜にでも……」

「あんたらのお祭りかい……。仕方ないね、壁を直すのは今度でいいよ」

どうせウチの壁なんてお祭り中は見ないでしょ、と大家は皮肉交じりに言ったが、多分お祭りが終わったって誰も見ないだろう。でも、彼女はこの寮をととても大切にしているし、仮に誰が見なかったとしても、壁は綺麗であって欲しいのだ。

「その代わりに、これは持ってってもらおうよ」

彼女は持っていたバスケットを彼に手渡した。中にはバケットとチーズ、それにハムまで入っている。絞り染めのピンクのハンカチが、それらを隠すように覆っていた。ゲッ、と菅木は思った。いや、多分呟いていたと思う。

「悪いんですけど、俺、人を待たせて……。大家さんが行かれてはいかがですか？」

正直言って、あの部屋には近寄り難い。

「あたしゃ嫌だね。あの爺さん、妙なところから金を借りてるみたいで、取立てがうちまで来るんだ。顔を見たら小言を言っちゃいそうだよ。それに、あんた最近めっきり会ってないだろう？」

顔見せてあげなさいな。そんで、さっさと金を返すよう言ってやんな」

腹を立てつつも、ちゃんと朝御飯を作るという仕事をしているのだから、大家さんは責任感のある人だと思う。……でなければ孤児の自分をここに住まそうとは思わないか。

沢山恩があるし、これくらいの仕事は引き受けようかと菅木は思い直し、バスケットを受け取ると、大家は「まあせいぜいお祭りを楽しんできな」と言った。そして思い出したように、切ったバケットの端にレタスとバターを挟んで作られたサンドイッチを投げてよこした。

「あ、あのお代……」

「あんたらを飢えさせないようにってのが、旦那の遺言だからね」

そして赤子をあやしめながら、一階玄関横の部屋へ入っていった。

洗濯槽の中に戻り、二階の角部屋に住む老人――宛中（あてなか）の扉を叩いた。そして早口に「朝食置いときますよ」と言って、その場から逃げ出そうとする。しかし、菅木を扉の隙間から伸びた腕が捕獲した。俺は犬や猫ではないのだけどなあ、と、彼は再び後ろ襟を掴まれて思

った。

「菅木！ ちょっと来てくれ！」

「ちょっとでもいやです」

「固いこと言うな」

元より、彼に拒否権はなかったらしい。菅木は部屋に引っ張り込まれると、そこにぽつ然と鎮座する一枚の大きな絵画を観た。菅木の身長ほどのキャンバスには、世にも不思議な風景が描かれている。額には「バベルの図書館」と銘打たれていた。

「凄い構図ですね……」

四方八方全て、本がみっちり詰まった書棚。地面までも本の背表紙で出来ているので、人間がこの空間に入ることを想定されていないようだった。こんな風景画は過去に見たこともない。無数に画集を見た菅木がいうのだから、斬新と評しても過言ではないはずだ。

宛中は「これが天上の光景だ」と言った。いつも通りだった。彼は若い頃、宗教画の名手として各地の教会を回り壁画を描いてきたそうだが、耄碌（もうろく）してからはそれこそ荒唐無稽（こうとうむけい）な絵を狂ったように描き続けている。その体力は凄まじいが、年甲斐に落ち着いてくれというのが菅木の本心だった。彼には小さい頃からお世話になっている、だから宛中を「他人は他人」と割りきって見放すことは出来ない。でも、最近の狂騒ぶりは見ていて辛かった。彼が距離をおいていたのはそういう理由からである。

「神も天使もいないんですけど」

「そうだ。天上には神も天使もいない」

教会が聞いたら目を剥くような一言だ。かつて「天国を見る目」を持つといわれ尊敬された灰機（はいのり）宛中はもういないのか。

「天上には、ただ本がある。本。所狭しとおかれる本だ。お前のお父ちゃんも、そこにいる。わしにはそれが解るんだ」

彼はパンやチーズを食べる。

「いませんよ。父さんは神や天使がいる天国にいったんです」

菅木も大家から貰った朝食を食べた。パンは硬かったが、野菜は新鮮だし、バターだってみずみずしい。

食べ物を分けてもらうことは珍しくなかった。貧乏芸術家を助けようという意思が、街に根づいているように感じる。この街は世界一の芸術都市、使用者がいるところに商品は集まるため、画材や彫材の質も世界一であるが、きっとそれだけではない。世界一になった理由は、数字だけでは説明しきれない。

「宛中さん。大家さんが心配していましたよ。借金して大丈夫かって。……俺も少なからず心配しています」

妙なところから金を借りたというのは、きっとあの絵を完成させるためだ。高純度の油絵具を使用したことが、絵を見れば一目でわかる。あの青、フェティ国境の山脈で採掘される瑠璃を使っている。市場に出回っている絵具とは比べ物にならぬ存在感である。

「金なぞ、芸術の前では問題じゃない」

そんなのは、この街にいる誰もが思っていることだ。誰も金を稼ぎたくて絵を描きだしたわけではない。だが、地位が生まれ利権が生まれ、そうしていく内に芸術とは何哉（なんぞや）という当たり前の疑問が複雑になり、今やそれは「金を稼げるか」という物差しによって計られている。

「でも実際は、お金がないと、生きていけないんです」

まるで世の代弁者だ、そういう自覚はあったが、口を閉ざすことはできない。

「絵具を買うにも、パンを買うにも、全部この『一番価値のある紙幣（え）』を使わなきゃいけない」

「本当にそう思っているのか？」

そう思っているから注意している、はずなのに、純真な光を秘めた宛中の双眸に見られると、他者を説得することで自分をも納得させようとしている姑息さが露見してしまったような気がして、うんとは言えなかった。

「そうじゃなかったらいいな、って思います」

楽園（アルカディア）と呼ばれたこの街も、美しいのは表層的なものだけ。自浄能力を持たぬこの街は、段々と汚れていっている。まるで同じ筆洗を使い続けて絵を描くように。

「……金は返す。当てがあるんだ」

「本当ですか？」

「ああ」

ああ、だって？ そんな簡単に金を返せるのならばとっくに返しているだろう。

だがいくら菅木が声をかけたって、彼は大丈夫と繰り返すばかり。菅木はよく考えた末、利子くらいになればいいと、この一週間で稼いだ金を、給料袋ごとこっそり机の上に置いてきた。

金は惜しかった。でも、自分の父代わりとして何年も面倒を見てくれた宛中が、このまま絵具に溺れて、借金を膨らませていくのが耐えられなかった。この端金で彼を正気に戻せるのならば――

「どうした。元気ねえな」

雑踏をかき分ける刻。菅木は彼女の後ろを歩く。出かけるときはいつも彼女が前を歩いている。

ここは露店市である。五つの管によって出来た色とりどりの天蓋の下で、商人が異国から輸入されてきた珍品を並べている。通路は狭く、通行人で混み合っていた。まさに芸術家然とした格好の人も多かったが、アルトニアからの観光客や、自動二輪を押す旅人、お付きを侍らせる貴族など、総体で見れば冷やかしの方が多そうだ。

どこからか陽気な音楽が聞こえてくるし、往来には笑い声が度々響いたが、それは菅木の孤独を煽ることしかしなかった。それは補色のように、菅木のブルーな心境を引き立てた。胸の中一杯になった不安を、なんとか言葉にして吐き出した。

「絵を描くってなんだろうって、考えてたんだ」

通り過ぎる露店の中には、菅木の食指が動くような物も並べられていた。でも見る気になれ

ない。さっきから彫刻系の有名店ばかり見ているのは、そのせいだ。刻は一瞬、呆気にとられたような表情をする。そして慌てたふりをして「おいおい、気取りに噛み付かれるぜ」とおどけた。菅木も合わせて笑うが、段々その笑みは弱くなっていく。

「ほんとに悩んでんだな」

と刻が言った。改めてそう言われると、つい否定したくなってしまいが、それは目下シリアスな悩みで、祭囃子を頭の片隅に追いやってしまうほどのものだった。

「俺は、息したり、物を食ったりするのと一緒だと、思うけどな」

商人の一人娘という地位を捨ててこの街にやってきた彼女だけに、その言葉には説得力がある。

「うん。俺もそう思う。だからこそ、意識してなくてさ。絵を描く意味を」

「意識していない。正しくその通りだと思うんだ。俺たち芸術家は生まれたときから創作しなければいけなくなる『種』のような物を持っていて、それが意思に関わらず勝手に芽吹きちまうんじゃないか」

この創作衝動を説明するのに、これ以上の言葉は要らないだろう。しかし、彼女は「種」と綺麗な言い回しをして、あたかも大輪を咲かすかのように言ったけど、それは「呪い」と言い換えても不自然無いように思われた。

前方で少年の声が聞こえる。それと、喇叭（らっぱ）の音。憲兵隊が雇っている広報だ。厚い布生地ハンチングを被った少年が、ラッパホーンをけたたましく鳴らしながら「号外！号外！」と叫んでいる。皆煙たそうに少年を避ける中、菅木と刻はそれを貰い受けた。規定枚数を配らないと少年に罰符（ばっぷ）が付くことを、彼らは知っていたから、無視できなかったのだ。

重罪人黒野黒須手掛り欲ス

と銘打たれた新聞。菅木はそれを折りたたんで衣囊に入れた。少年の周りだけ人混みが失せていて、そこがこの渋滞の原因となっていたらしい。号外を貰ってからは、二人の歩みも滑らかになった。石造りの商店街、その入口に差し掛かったとき、彼の腕を刻が掴んで、一方を指さし声高に叫んだ。

「見てみるよ菅木、百日紅（さるすべり）だ！」

ガラスケースの中に入った木槌は、斑なくニス掛けされていた。「百日紅の木を削って作られた一点物、市場にはなかなか出まわらない貴重なもんだ」と彼女は言った。

お茶を濁された気もするが、彼女を言い負かしたところで現実が変わるわけではない。彼女もまた、それを分かっているからこそ、この話題を続けたくなかったのだろう。菅木は考えるのを中断すると、大きく息を吸い込んだ。牛肉の焼ける匂い、風に揺れる鈴の音、そして沢山の人の話声（はなしごえ）と足音。それが現実だ。芸術云々は頭の中のことでしかない。

「その木槌、今のとは違うのか」

「俺のは樫（かし）、一年も経てば使い物にならなくなっちゃうんだ。親方のは百日紅、もう二

十年も使い続けてるらしい。凄いよな。奥さんを二年ごとに取り替えてるくせに、木槌は十人分だけ。もう槌と結婚しろってんだよな。ハハハ」

「あ、親方だ」

「あわわわっ。……って親方の彫像じゃなか。驚かせんなよな一。あいつ、簡単に作れるからってトルソ作りすぎなんだよ。`神は細部に宿る、とか言ってるくせに指先作らねーんじゃ世話ないぜ」

その木彫りの頭をポンポンと叩いた。よくもまあ自分の師匠に向かってそんなことが言えるなあと菅木は思う。無花果彌生は大家であり、大家には当然黒い噂も付きまとう。菅木は刻の口から、その噂が無根なわけではないことを聞かされていたので、彼女が師匠に反感を抱いていることも知っていた。

がま口とにらめっこする刻。ひーふーみーと小銭を数え終わると、木槌の値札を見つめる。そうすることによって数字が変わるのだと信じているかのようだ。

木箱に座り、気怠そうに店番をやっている老人に「オジちゃん。これ、もうちょい安くなんねーかな?」と言った。

「ああ? もう十分安いじゃろうが」

「いやーそれは分かってる。分かってるよ。でもこの通り、足りなくてさあ」

「なら売れん」と朴訥（ぼくとつ）に答える老人。

「こんなに頼んでんだからいいじゃんかよお。なあ」

「店先で愚図るな。客が逃げるじゃろうが」

老人は、はたきを刻の鼻先にちらつかせて追い払う。まるで邪魔な子供扱いである。刻はチェと拗ねるように舌を打つと、身を翻して菅木の眼を見た。

「仕方ない。奥の手を使うか」

両手を胸の前で組み、菅木にニコッと笑いかけた。そして「あら」とわざとらしく躓いて彼の胸に飛び込み、雛鳥のように無垢な双眸で菅木を射とめる。

「な、なんだよ」

声は上ずり、頬は赤くなる。普段、女性として意識していないから、改めて線の細さを認識してしまうと、しなくてもいい緊張をしてしまうのだ。こちらにもたれ掛かってきているのだからどっかしら支えなければいけないのだろうが、どこに手をついたら大丈夫なのかすらわからず、また、なにが大丈夫なのかもよくわからない。

「お……ね」

「え?」

「お金を貸して♪」

菅木は彼女の肩を掴んで自分から引き離すと、服に付いた汚れを手の甲で払うような仕草を見せ「さあ他行くぞ」と踵を返した。そんな彼の足に刻は縋りつく。まるで愛憎物語の一節のようである。

「お願いだよ菅木い! ほっぺにチューしてやっからー!」

「いらねーよ。……あ、そうだ、今夜」

今夜？ と刻は頬を赤らめる。

「壁直すの手伝えよ。そしたら金を貸し……、なんで怒ってんだ？」

菅木に指摘され、刻の顔はますます赤らんだ。

「分かったよ。直してやるよ。どうせ俺には壁を直すくらいしかできませんよー」

「いや、刻の左官技術はなかなかのもんだろ」

「そんなところ褒められても嬉しくない！」

直してくれるならと、懐に手を入れたとき、給料袋がないことに気がついた。そうだ、宛中に渡してしまったんだ。気まずそうな笑みを浮かべながら「やっぱりなかったわ」と伝えると、金は貸してもらえないわ尊厳は傷つけられるわで踏んだり蹴ったり刻が、「アホ！アホ！」と言いながら菅木をポカポカ叩く。

「いていてえ！ 無花果彌生に金貸してもらえばいいだろ！」

「あの人は無理、守銭奴なの知ってんだろ」

無花果彌生、という言葉聞いた老人が木箱から急に立ち上がると、「無花果彌生はお前さんの師匠か？」と訊ねる。菅木は顔を引きつらせた、刻が老人のことを煙たげに見ていた。

「違う。人違いだ」

声もどこか冷え冷えとしている。

「いんや、間違いない。……ほら、この新聞に載っとる！」

彼は授賞式の日新聞を持ってくると、どうだと言わんばかりに彼女に突きつけた。そこには、シャッターによって眼を眩ませた刻が、だらしない笑みを浮かべている写真が掲載されている。店主がお手伝いに対して「写真屋を呼んでこい！ 九十里（くじゅうり）刻先生だぞ！」と叫ぶ。

その声を聞いた人々が輪を作るのに、時間は掛からなかった。露店を見ていた芸術家志望、街外からの観光客、それに卸業者までも彼女の顔を見に集まってきた。皆口々に

「じゃあこの子が九十里刻？」「生で見るの初めて」「以外に腕が細いな」「俺はもっと醜女（しこめ）だって聞いてたぜ」「こんな若いとは思わなかった」「横の貴方はお付きの人ですか？」

と勝手なことを言い始める。しまいには、さっきまで値下げを渋っていた店主が、木槌にリボンまで付けて「どうぞこれからも末永くよろしく申し上げます」と頭まで下げてきた。

ちょっとしたパニックになった店の前。突然現れた有名人に色めき立つ露店市、誰よりも困惑しているのは九十里刻その人だった。彼女は押し寄せる大群にすっかり肝を潰しており、無理に握手しようする輩に、乱暴に手を掴まれ、身体をぶんぶん揺さぶられていた。わざわざ写真屋を連れてきて、彼女とツーショットしようとする店主。その時、フレームの内に入るなど、菅木は店主に突き飛ばされた。

「菅木っ」

フィールドカメラを設置し、冠布（かんぷ）に潜ったカメラマンが、歩き出した刻を注意するが、彼女はそんなの意に介さず、転んだ菅木を助け起こした。そして「俺に構うな！」と怒りを顕にした。しかし、誰も聞かない。彼女の声はどこにも届かない。

刻が菅木に縋るような視線を向けた。そして、助けて、と囁く。

自業自得だ、有名になる対価だ、これも宿命だ――拒否の言葉が浮かんで消えた。菅木は気付く、自分は友達を見捨てようとしているということに。彼は極自然に浮かんだ裏切りへの渴望を、理性で叩き伏せた。

でも、「走るぞ」と言って手を引っ張ったとき、彼の心は空っぽだった。虚しかった。女の子を敵から守ったぞ、なんて達成感は一抔もなかった。ただひたすらに空虚だった。

欺瞞だらけだな。俺の絵と一緒に。

彼の頭の中に、あの絵が浮かぶ。燃えるように花を散らす、大樹の絵。あんな樹は世界のどこを探しても存在しない。存在しないものに縋ることは、こんなにも心を空っぽにする。





今回は「売文の徒」との合同企画ということで、文芸島で一時話題になった某ミステリー小説について、池之沼氏に話を伺ってみました。

——虚構の作品となってしまった

その初稿が公開されたとき、多くの人が震撼し、衝撃を受けた。

一見、在り来りなミステリー小説の体裁をとっているにもかかわらず、その中に読者を惑わすための様々なトリックが埋め込んであるのだ。

それらは圧倒的な存在感を持っているにもかかわらず、その本当の役割にはなかなか気付くことが出来ないようになっている。

出版された冊子には推敲されたものが載っており、初稿で使われていた技法のほとんどが修正されてしまった。今となっては、関係者から極秘に見せてもらうしか方法がない幻の作品だ。

冊子を手にとった方はお分かりだろうが、推敲版は本来の作品のトリックが崩壊して、虚構の作品となってしまった、と池之沼氏は残念そうに語りました。

初稿時のトリックが削除されてしまったことにより、作品自体が成り立たなくなってしまった、といったところでしょうか。

――現代社会を冷徹にとらえた鋭い視点

作品の編集担当者も、そして作家自身も気が付かなかった、作品に隠されたトリック達。それらは、何層にも重なり合っている。

つまり、トリックがトリックを覆い隠す構図をとっている、ということだ。叙述のトリックはミステリー小説において先例がいくつもあるが、誤字を利用する、というものはあまり無い。

実は、一見誤字脱字と思われていたものもトリックのひとつであり、一番の要となるトリックがはじめから矛盾をはらむものだったという真実を読者に気付かせない役割を果たしている。

これは現代社会に通じるものがある、と池之沼氏から迫真のコメントを頂きました。

――「文学の奇跡」

推敲でトリックのほとんどが修正されてしまったのは、その技法が編集担当者に認められなかったからだろう。確かに、それらのトリックは通常、在り来りな筋書きの邪魔になるものでしかない。

前衛的な表現や技法が理解されず、日の目を見ることが出来ないのは悲しいが、それが作者の意図したものでない、となれば仕方のないことである。

初稿で使われた構図は、全くの偶然から生まれたといえる。

この技法自体が作者の無自覚であり、しかもそれが成立している、というのはまさに「文学の奇跡」といえるのだろう、と池之沼氏はインタビューを締めくくりました。

作家紹介

修平

C C C

ライトノベルらしいライトノベルを執筆する。

スーパー速筆。

城野伊織

学び舎のブリットル

主な執筆ジャンルはミステリー。

淡々と進んでゆく文体が特徴的。

締切は守ってください。

霜山モリス

カラカラ

リズムの良いコメディ調の文体で

特徴的なキャラクターを描く

絵師紹介

Dake

木村なづき

めーぷる

表紙イラスト

小茶菓こう

編集部

松原葵
紀谷実伽留
齊藤裕之介
△ t (でるたていー)
木村千佳
上田望未

あなたの気に入った作品に投票しよう！

「月刊エトランゼ」を手にとっていただきありがとうございます。
当サークルでは、より良い雑誌作りを目指し、今後の改善、内容充実を図るため、
読者の皆様に、作品の人気投票を行っております。
下記リンクにアクセスしてご回答ください。ご協力よろしくお願い申し上げます。

月刊エトランゼHP
<http://kmit-monthly.weebly.com/>

2014.1/08 創刊号 1
2014.1/29 創刊号 2
日芸キャンパスにて配布中
電子版もあります

月刊イトランゼ

ライトノベルフリーペーパー

2014.2/25 第3刊
2014.3/20 第4刊
電子書籍で随時配信予定

月刊誌公式サイトで情報配信中!
<http://kmit-monthly.weebly.com/>



現在 6 タイトル人気投票中! 投票はQRコードからアクセス!

①フィッツロビンと
前向きな街



②レストラン・
グラフィティ



③舞々コンタクト



クロノ・クロス・クロニクル
④ C C C



まね
⑤学び舎の
ブリットル



⑥カラカラ



ヤンデレ企画、やっています。
<http://kmit-project.weebly.com/>



儂くも美しいヤンデレの世界、のぞいてみませんか?

ヤンデレを
こよなく愛するメンバーによる
「ヤンデレ座談会」
好評掲載中!

その他、
ヤンデレに関する
作品やイラストも
揃っています。

KMITのweb企画ページ



月刊エトランゼ 創刊号2

<http://p.booklog.jp/book/82694>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行 : 日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT (ケミット)

URL : <http://kmit.weebly.com/>

小説執筆 : 修平/城野伊織/霜山モリス

イラスト : Dake/木村なづき/めーぷる

表紙 : 小茶菓こう

編集 : 紀谷実伽留/齊藤裕之介/△ t (でるたていー) /木村千佳/上田望未

発行者 : 松原葵

月刊エトランゼ HP

<http://kmit-monthly.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82694>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82694>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ